E. M. FORSTER 研究

——*Where Angels Fear to Tread* にみる女性の生き方——

大　野　佳代子

はじめに

『天使も踏むを怖れるところ』と題されたこの小説は E. M. Forster の第一作である。今から75年も前に出版された作品であるにもかかわらず，ここに描かれている何人かの女性の生き方には，今日の我々の心にも強く共感を覚えさせるものがある。キャリアウーマンが志向され，翔んでる女がもてはやされる昨今の風潮であるが，まだまだそれは一般社会の隅々にまで定着しているとは思われない。Forster がこの小説を執筆した当時，19世紀の末までは，女性は〔力ある男性の保護を必要とする弱き器[1]〕であったし，〔それはほかならぬ女性の大部分が伝統的なものの考え方をしていたからなのである。女性は物質的・経済的・政治的・生物学的無知を女らしい魅力の一部として押しつけられていた。しかし，それは無知とは呼ばれないで無垢と呼ばれていた。医者という職業に腕ずくで入った勇気ある女性にとって，不倶戴天の敵は他の女性であった。[2]〕女性は弱き者・保護されるべき者という騎士道精神に裏打ちされた因襲的概念の中にあまりにも長く居続けてきた女性たちにとって，行動する女・自由な女は信じられない存在であったろうし，それ以上に，自分たちの生きてきた信条・築いてきた生活を脅かし破壊する敵でもあったのである。しかしこの根強い＜女性の役割＞に対する社会通念に対して，新しい動きが起こってきた。〔19世紀の末に，女性の手によって小説がどっと書かれるという注目すべき現象が起こった。これには二つのはっきりとした理由がある。高等教育の恩恵を受けた女性が活躍する世代が来ていたこと，≪女性の地位≫の問題が新たに，しかも鋭く論議されてきたことである。……[3]〕このような謂わば＜女性の地位＞が揺れ動いていた時代にあって，Forser は女性というものをどのようにみていたのであろうか。彼の眼に映ったさまざまな女性の姿，また彼が望ましく思う女性の像とはどのようなものであったのか。女性をとりまく社会，さまざまな社会通念，その中で彼女たちはどう生きることができたか——これは，現代の我々にとっても十分に注目に値するテーマである。彼女たちの生き方を通して，Forster の目指す人間関係[4]，即ち彼のユートピアを *Where Angels Fear to Tread* の中に探ってみたいと思う。

I) Sawston

小説の舞台はロンドン郊外の町 Sawston と，イタリアの hill-town, Monteriano である。Forster の小説ではしばしば二つの異なった価値観を具現するものが対照的に扱われている——たとえば *Howards End* に於ける Schlegel 家と Wilcox 家，また *The Longest Journey* に於ける Ancel と Agnes といったように——が，ここではこの二つの町 Sawston と Monteriano が二つの異なった世界を象徴していると思われる。この小説中の主な登場人物は，抑圧的で閉鎖的な町 Sawston に住む Herriton 家の者三人——体面を重んじ，家の名誉を守るためとあらばどんな犠牲をも厭わない策謀家で自信家の Mrs Herriton，その息子で母親のあやつり人形であることを自嘲的に自認している Philip，娘で狂信的と言えるほど熱心なプロテスタントである Harriet —— と，この家の長男に見染められ請われるままに嫁いではきたものの，本来無教養で知性に乏しくた

だ純粋に快楽を求めるのが好きなために，夫の死後はずっと冷たい監視の下に生きてきた嫁の Lilia，そして Lilia が旅先イタリアで恋に陥り電撃的に結婚をすることになるイタリア人のしがない歯医者の息子 Gino, Lilia の旅に同伴する Miss Abbott，以上6人である。

イタリア旅行に出発する Lilia と Miss Abbott を見送る冒頭の駅のシーンでは，先に紹介した Gino を除く5人全員と Lilia の母親 Mrs Theobald, Lilia に好意を寄せている青年 Mr Kingcroft, それに Lilia の幼い娘 Irma が顔をそろえる。ほんの2ページ半しかないこの駅のシーンに Forster はこの小説に出てくるすべての人物を登場させているが，我々の印象に残るのは3人の人物，即ち Lilia, Mrs Herriton, Philip である。なかでも特に我々の目をひくのは，多勢の見送り人に囲まれて異常なほどに興奮し，はしゃいでいる Lilia の姿である。

> ...The sight of so many people talking at once and saying such different things caused Lilia to break into ungovernable peals of laughter. 'Quite an ovation,' she cried, sprawling out of her first-class carriage. 'They'll take us for royalty. Oh, Mr Kingcroft, get us foot-warmers.' The good-natured young man hurried away,... 〔WA, p.5〕

Mr Kingcroft に足温器をもってきてくれと声をかけた Lilia はそれっきり頼んだ足温器のことも Mr Kingcroft のことも忘れてしまう。彼女はその場限りのほんの思いつきを，彼の顔を見た時口に出したにすぎないのである。それが口から発された途端もうそのことは彼女の念頭からきれいに消えてしまう。すっかり興奮している Lilia は，皆とうわの空で次から次へと言葉をかわし合う。娘の Irma に対してさえも，おざなりの気もそぞろのやりとりをする。

> She caught sight of her little daughter Irma, and felt that a touch of maternal solemnity was required. 'Goodbye, darling. Mind you're always good, and do what Granny tells you.'... Irma lifted a serious face to be kissed, and said cautiouslly, 'I'll do my best,' 'She is sure to be good,' said Mrs Herriton,... But Lilia was already calling to Miss Abbott, 〔WA, pp.5-6〕

Mr Kingcroft に恋されている者のもつ気まぐれな優越的態度でものを頼み，娘の Irma に母親らしいしかつめらしさをもって声をかけ，一方その合間をぬっては話しかけてくる義弟の Philip の，今度の旅行についての諸注意にも殊勝気な様子で耳をかたむけるこの Lilia の八面六臂的活躍の姿から，一体我々は彼女にどんなイメージを抱くであろうか。我々に浮かぶ Lilia の像は，あまり思慮がありそうには思えない，軽薄そうなしかし愛敬のある，恐らく美人であろう若い女性といったものである。Mr Kingcroft は Lilia の言葉を聞くや否や一目散に探しに出かける。上述の 'The good-natured young man hurried away' という一文からは，Lilia からものごとを頼まれたという彼の喜びが感じられる。しかし，間に合わず，列車が既に動き出し人々が手を振っている所へようやく戻ってくる。

> At that moment Mr Kingcroft reappeared, carrying a foot-warmer by both ends, as if it was a tea-tray. He was sorry that he was too late, and called out in a quavering voice, 'Goodbye, Mrs Charles. May you enjoy yourself,...' Lilia smiled and nodded, and then the absurd position of the foot-warmer overcame her, and she began to laugh again. 'Oh, I'm so sorry,' she cried back, 'but you do look so funny. Oh, you all look so funny waving!...' And laughing help-

lessly, she was carried out into the fog. 〔WA, pp.6-7〕

善良で律気で人が好く生真面目そうな Mr Kingcroft のイメージをバックに天真らんまんそうではあるがいかにも気まぐれで，その時その時のはずみで行動している Lilia という女性のイメージが鮮明に浮かび上ってくる。つまり我々の抱く Lilia のイメージは Mr Kingcroft という存在があってはじめて鮮明なものになるのである。もう一人，Lilia のイメージを鮮明にするのに役立っている人物がいる。Miss Abbott である。彼女は全く Lilia と対照的に描かれている。

Miss Abbott, a tall, grave, rather nice-looking young lady who was conducting her adieus in a more decorous manner on the platform. 〔WA, p.6〕

Lilia はこうして，間の抜けた様子で足温器を両手でささげ持っている哀れな人の好い青年 Mr Kingcroft や，一生懸命手を振る見送りの人々に対し，ただ笑いころげながらイタリア旅行へと旅立つ。ここで 'helplessly' と表現された Lilia の笑いには，一体何が象徴されているのか。彼女の異常なはしゃぎぶりは何を我々に伝えようとしているのか。我々の興味は彼女を基点として，やがて彼女をとりまく人々へと移行する。

Philip は以前にイタリア旅行をしており，その国のもつ自由で明るい生き生きとした力強さにすっかり惹きつけられている。今回 Lilia がイタリア旅行をすることになったのも彼の発案であった。22才の時に初めてイタリアへ行き，そこでの生活を素晴らしいものに思う。以来自分の住む Sawston に対して批判的になる。彼は何かというとよくイタリアを引き合いに出し，いかにイタリアが素晴らしい所であるかを力説するが，彼のイタリア礼賛は，母親を始めとする家族の者が彼のイタリア旅行を快よく思っていないことを十分に承知のうえの発言なのであり，謂わば彼のもつ snobbery の表われである。

'And I do believe that Italy really purifies and ennobles all who visit her. She is the school as well as the playground of the world. It is really to Lilia's credit that she wants to go there.' 'She would go anywhere,' said his mother, who had heard enough of the praises of Italy. 〔WA, p.9〕

彼は自分の周囲のものいっさいを見下している。Lilia を ' "she is a Philistine, appallingly ignorant, and her taste in art is false. Still, to have any taste at all is something." ' (WA, p.9) と評し，イタリアを礼賛する一方で自分の住んでいる町 Sawston を批判し，そこの忠実な住民である Harriet を逆上させる。(WA, p.14) 彼は出発間際の Lilia にこんこんと言ってきかせる。イタリアがどんなに素晴らしい所か，イタリアではどう振る舞うべきかといったことを。そして最後にもっともらしく，こうつけ加えることも忘れない。

'And don't, let me beg you, go with that awful tourist idea that Italy's only a museum of antiquities and art. Love and understand the Italians, for the people are more marvellous than the land.' 〔WA, p.5〕

彼は知ったかぶりの偽善者であることがよく分る。Philip からさんざんイタリア旅行についての心構えを聞かされる Lilia が ' "How I wish you were coming, Philip." '(WA, p.5) と言えば ' "I wish I were." ' (WA, p.5) と答える彼であるが，その実彼は，仕事が忙しく自分は町を離れられないと考えることを大いに楽しんでいる俗物なのである。(WA, p.5)

ところで先述の如き Lilia の人柄を見抜いており，その軽佻浮薄ぶりを苦々しく思っている

のは，彼女の義理の母 Mrs Herriton である。Lilia が Irma に留守中のことを言って聞かせている時に，彼女は Irma のすぐ傍にいた。'"She is sure to be good," said Mrs Herriton, who was standing pensively a little out of the hubbub.' (WA, p.6) この彼女の一人言にも似た短いつぶやきには，＜Lilia という母親さえ傍にいなければ Irma は必ずまともな娘に育つ。Lilia の悪い影響さえなければ……＞という確信がこめられており，そこには当然 Lilia に対する皮肉も含まれていたはずなのだが，もうその時には既に Miss Abbott の方に向いていた Lilia の耳には，彼女の声は全く届いていない。Forster はイギリス中産階級の人々のもつ，つめたさ，かたくなさ，偏狭さ，そして彼らの自由主義・民主主義の硬化した因襲・偽善性を内部から告発した作家である[5]と言われている。このつめたく，かたくなで，偽善性にみちた社会が Sawston であり，それを具現する人物として描かれているのが Herriton 家の先に述べた Philip であり Mrs Herriton である。笑いさざめきにみちた明るい華やかなプラットフォームの一群の中にあって，一人ポツンと孤独を保っている Mrs Herriton の姿は一種異様であり，一瞬我々読者に首をかしげさせる。しかし，愛敬をふりまいている Lilia とはきわめて対照的に映し出されたこの彼女のポーズこそ，Lilia に対する全 Sawston の態度の象徴なのである。Charles は彼女からみれば美しいからというただそれだけで Lilia を選んだのである。

> For six months she schemed to prevent the match, and when it had taken place she turned to another task—the supervision of her daughter-in-law. Lilia must be pushed through life without bringing discredit on the family into which she had married. 〔WA, p.9〕

彼女は自分の家庭に不名誉なこと，外聞の悪いことが生じるのを極力避けようとする。そのための Herriton 一家の結束は非常に固い。彼女の強力な意志の下に一家は行動するのである。彼女は生活のすべてを 'a game of power politics'[6] と考えている現実家であり，特に家庭生活というものを絶対不可侵のものとみなしている。

> Mrs Herriton did not believe in romance, nor in transfiguration, nor in parallels from history, nor in anything else that may disturb domestic life.
> 〔WA, p.9〕

第4作 *Howards End* では Forster は，すべての男性ばかりでなくすべての女性も働くことが当然になるような時代がくることを希っている女性 Margaret Schlegel をヒロインにしている。彼女は，自立する女性つまり男性と対等に社会的役割を担っていく女性として生きることを常に心がけている。それだからこそ，彼女一人が Wilcox 家の男たちの中にも仕事への情熱と有能さという点に於て美質を認めることができ，この小説の副題にもなっている Forster のテーマ 'connection' を遂行し得るのである。しかし Mrs Herriton の世界には，女性に関するこのような考え方は存在しない。まだその時機に至っていないのである。女性は社会的因襲により，どんな種類のものであれ，実際に働くということは許されていない。女性は自分のエネルギーのはけ口を他に見つけなければならない。そして Mrs Herriton は自分のエネルギーを，子供を通して生き，子供たちの生活を支配・管理しようと努力することに向けるのである。'She always asked her children's advice where possible.' (WA, p.62) という一文を読む時，我々はそこに子供を自分と同等の一個の人間として扱い，その意見を尊重するものわかりの良い母親像を想像する。が，実はそうではないのだ。Lilia は Herriton 家の人々の反対を押しきってイタリアで再婚し，イタリア人との生活を営む。そして，あげくの果てに男児を出産しその子とひきかえに自分の命を落とすのであるが，その死の知らせが届くと

Mrs Herritonは直ちに家族会議を開き各自に意見を求める。この時 Philip は24才になったばかりであった。Philip も Harriet も熱心に自分の思う所を述べる。このような時，Mrs Herritonは 決してイニシアチブをとらない。彼女は一見，子供たちにまかせきっているように，そして子供たちを信頼し，自分の意見は問わず彼らの出した結論に従っているかのようにみえる。が，実はこれは Mrs Herriton のもつごまかし (manipulation) のもうひとつの姿にすぎないのである。

> She had let him (=Philip) worship Italy, and reform Sawston—just as she had let Harriet be Low Church. She had let him talk as much as he liked. But when she wanted a thing she always got it. 〔WA, p.77〕

彼女は自分がどう動けば子供たちがどう反応するかをよく知っている。イタリア旅行から帰ったばかりの Philip が興奮さめやらず Sawston 批判をし，そのほこ先を Harriet の生活ぶりに向けた時，たまりかねて Harriet は母親に訴えるのであるが，その時 Mrs Herriton はこう言って Harriet をなだめる。'Mrs Herriton replied in the memorable words, "Let Philip say what he likes, and he will let us do what we like."' (WA, p. 14) 結果はまさにその通りになった。

> Nothing had happened either in Sawston or within himself. He had shocked half a dozen people, squabbled with his sister, and bickered with his mother. He concluded that nothing could happen, ... 〔WA, p.62〕

自分の全エネルギーをひたすら家庭に注いできた結果，彼女は子供たちを自分の思うように操縦することができるのである。'His mother (=Mrs Herriton) knew how to manage him. He agreed enthusiastically.' (WA, p.65) Lilia の一件を経た今，Philip があれほど礼賛していたイタリアについてさえ，彼女は Philip の考えを自分の望む方向へもっていくことができる。' "Then you were still infatuated with Italy. It may be full of beautiful pictures and churches, but we cannot judge a country by anything but its men." ' (WA, p.64) というMrs Herriton の言葉に Philip は悲しげにうなずく。

> Italy,... was ruined for him. She had no power to change men and things who dwelt in her. She, too, could produce avarice, brutality, stupidity—and, what was worse, vulgarity. It was on her soil and through her influence that a silly woman had married a cad. 〔WA, p. 62〕

Lilia の死後，幼い弟よりという名目で Gino から Irma に絵はがきが届く。何の変哲もない，このただの絵はがきの数が2枚になった時，Mrs Herriton はこのようなものを送ってよこした Gino の真の意図は何であろうかと思いをめぐらす。が，彼女は自分の考えは言わない。しかし自分の期待通りの返事をうまく Philip の口からひき出すのである。

> 'I cannot think,' said Mrs Herriton, 'what his motive is in sending them.' Two years before, Philip would have said that the motive was to give pleasure. Now he, like his mother, tried to think of something sinister and subtle. 〔WA, p.72〕

彼女は家の体面は勿論であるが，その長としての己れの体面を保つことにも神経を使っている。自分の尊厳を傷つけられぬよう万全の注意を払う。'She would not allow herself to be frightened by the unknown.' (WA,

p.18) 彼女は常に自分の感情を抑制しており，取り乱したりうろたえたりすることを固く自分に戒めていた。にもかかわらず Lilia の結婚を知った時思わず彼女が怒りを爆発させたのは，ひとつにはそのニュースをもたらしたのが彼女の大嫌いな，馬鹿にしきっている Mrs Theobald だったからでがる。

> 'How dare she not tell me direct! How dare she write first to Yorkshire! Pray, am I to hear through Mrs Theobald —a patronizing, insolent letter like this? Have I no claim at all? Bear witness, dear'—she choked with passion — 'bear witness that for this I'll never forgive her!' 〔WA, p.15〕

家庭内のあらゆることを，自分の周囲の全生活を，巧みな手腕で思うがままに支配してきた彼女にとって，Lilia のしたことは絶対に許せぬことであった。しかも日頃から一段と見下し庇護してきたはずの Lilia である。その彼女が自分の勧告或は命令を拒絶し結婚するというだけでなく，その決意を自分の存在を無視し Mrs Theobald に知らせるとは。常に自分の感情をコントロールし，めったに動揺や激情をおもてに表わさない Mrs Herriton が取り乱すのはこの時と，そしてもう一度 Lilia の死後イタリアに残されている赤ん坊をどうするかで，Miss Abbott に詰め寄られた時だけである。Lilia の死を知った時，彼女がまず感じたのはこれで厄介払いができたという安堵の気持ちであったろう。

> 'Here beginneth the New Life, then. Do you remember, Mother, that was what we said when we saw Lilia off?' 'Yes, dear; but now it is really a New Life,...' 〔WA, p.64〕

しかし Miss Abbott の問いかけの真の意図が分るまではそれを口に出すわけにはいかないし，悟られてもいけない。彼女は相手の出方をうかがってしばし沈思黙考をする。が Philip の方はそうではない。次の描写は策謀家 (manipulator) としての Mrs Herriton の姿をよく表わしているといえよう。Mrs Herriton, Miss Abbott, Philip 3人の会話である。

> 'I came to ask you; have any steps been taken? Philip was astonished. The question was impertinent in the the extreme..... 'About the baby?' asked Mrs Merriton pleasantly. 'Yes.' 'As far as I know, no steps. Mrs Theobald may have decided on something, but I have not heard of it.' 'I was meaning, had you decided on anything?' 'The child is no relation of ours,' said Philip. 'It is therefore scarcely for us to interfere.' His mother glanced at him nervously. 'Poor Lilia was almost a daughter to me once. I know what Miss Abbott means. But now things have altered. Any initiative would naturally come from Mrs Theobald.' 'But does not Mrs Theobald always take any initiative from you?' asked Miss Abbott. Mrs Herriton could not help colouring. 〔WA, p.74〕

Mrs Herriton の老練な狡猾さは，若いひたむきな Miss Abbott の前にたじろがざるを得ない。Mrs Herriton は，口先だけのきれいごとですまそうとする彼女の老獪な態度に業を煮やして Miss Abbott が席を立った後，ろうばいしている自分を見出し，急速に思慮をめぐらす。そしてイタリアへ行って赤ん坊を連れ戻してくることを決意する。急転直下，彼女がこのような決断を下したのは，ただ Miss Abbott に先を越されまいとするためだけであった。彼女が何よりも気にしたのは世間体であった。'Pride was the only solid element in her disposition. She could not bear to seem

less charitable than others.' (WA, p.77) Philip はこのような君臨者・操縦者としての彼女を冷徹な眼で眺めている。'He watched with a cold interest the duel between her and Miss Abbott.' (WA, p.77) かくの如くに強大な策謀家を母にもった彼は必然的に，その手足にならざるを得ない。(WA, p.77) 彼は自分が母親のあやつり人形であることを何らの苦痛もなく受け入れている。いや，むしろ自らすすんでその地位に甘んじていると言ってもよいかもしれぬ。彼は完全に自分を傍観者の立場に立たせている。'Philip was getting to enjoy his mother's diplomacy. He did not think of his own morals and behaviour any more.' (WA, p.73) 自分の意志を持つことを止め，傍観者としての己れにむしろ喜びを見出し始めているのである。彼は Mrs Herriton によってあやつられる人形であるが，その糸の配列を正確に知っている。

> Harriet, worked by her mother; Mrs Herriton, worked by Miss Abbott; Gino, worked by a cheque; — What better entertainment could he(=Philip) desire? There was nothing to distract him this time; his sentimentality had died, so had his anxiety for the family honour. He might be a puppet's puppet, but he knew exactly the disposition of the strings. 〔WA, pp.82-83〕

糸の配列までも知っている人形はどうなるか。Philip は，ただ観察者としてのみ生きていくようになる。何事にも無感動な人間になってしまうのである。彼は人間を観察するのはとてもおもしろい，自分を退屈させない一種のゲームだとみなしている。が，自分は常にその外にいて眺め，分析し，批評するだけなのである。Philip をこのような人間に仕立ててしまったのは，Mrs Horriton であり，Sawston なのであった。

II) Monteriano

Lilia は23才で Charles と結婚するが Herriton 家の人々からは，美しいだけが取り柄の知性のかけらもない手のかかる女と思われている。結婚前はさんざん Mrs Herriton から妨害され，結婚後は一層きびしい監視の下に置かれる。体面を重んじる Herriton 家の人々は Mrs Herriton の命令一下，Charles はもとより Harriet も，そして年若い Philip まで，彼女がボロを出さないよう，家名を傷つけぬよう，彼女の言動に目を光らせる。(WA, p.9) 未亡人となってからは新たに未亡人としての心構え，振る舞い方についても，Mrs Herriton から折にふれて説教をされる。(WA, p.10) しかし，これほど身の回りをがんじがらめに見張られていても Lilia にはあまりへこたれた様子は見受けられない。彼女は生来楽天家なのであろう。次の一文は，彼女が Herriton 家の人々にどう映っていたかを示すとともに，彼女のもつこうした天性の明るさ・無頓着さをよく表わしている。

> Lilia would not settle down in her place among Sawston matrons. She was a bad housekeeper, always in the throes of some domestic crisis, which Mrs Herriton, who kept her servants for years, had to step across and adjust. She let Irma stop away from school for insufficient reasons, and she allowed her to wear rings. She learnt to bicycle, for the purpose of waking the place up, and coasted down the High Street one Sunday evening, falling off at the turn by the church. 〔WA, p.10〕

Harriet は Lilia の婚約を聞いて Monteriano のホテルで知り合った男なんて，ろくでもない男に決まっていると言う。これに対して Mrs Herriton は，'"Nice or nasty, as I have told you several times before, is not the point. Lilia has insulted our family."' (WA, p.17) と答える。家の体面とか名誉を重んじ，

外聞をひどく気にする偽善と因襲にみちたSawston での生活を Lilia 自身はどう感じていただろう。夫 Chafles 亡き後はなおさらのこと，彼の生存中でさえ Herriton 家の人々の眼は Lilia の一挙手一投足に向けられていたし，Charles との愛情さえも彼女の満足のいくようなものではなかった。次は Gino との結婚に踏みきった Lilia が予想以上の Herriton 家の人々の猛反撃にあい，一層決意を固める場面であるが，我々には彼女がどんな結婚生活を送ってきたのか，Charles という男がどんな人間であったのか推察することができる。

> 'It mayn't be heaven below,' she thought, 'but it's better than Charles.'... She was reminded of Charles by a disagreeable letter from the solicitors, bidding her disgorge a large sum of money forIrma, in accordance with her late husband's will. It was just like Charles's suspicious nature to have provided against a second marriage.
>
> 〔WA, p. 39〕

Philip からは知性のかけらもない女と見下げられ，Harriet や Mrs Herriton からは見識のない無節操な女と嘲笑されてきた Lilia であるが，イタリア旅行に出て以来，何かが彼女の中で起こる。それは Philip がしばしば礼賛してきたところのイタリアという土地のもつ魔力のせいであったろうか。Lilia の婚約を破棄させようとやってきた Philip を前に彼女は自分の考えをまくし立てる。こんなに堂々とした Lilia を見るのは Philip には初めてであった。'He would not have made the concession in England; but here in Italy, Lilia, however wilful and silly, was at all events growing to be a human being.' (WA, pp. 21-22) 思いもかけなかった Lilia の変貌が Philip をたじろがせる。彼は彼女をあまりにも見くびっていたのである。Philip が Gino を評して，彼は要するにごろつきで下劣なやつだと言うのに対して Lilia は，イタリアにはごろつきは一人もいないと反駁する。しかもそれは，かつて Philip が好んで他人に言っていたほめことばの一つであった。(WA, p.30) 更に，Gino が歯医者の息子であることに Philip が難色を示すと，Lilia はこう言う。'"I think what people are is what matters."'(WA, p.31) 次に Lilia は，自分がどんなに今度の結婚に期待をかけているかをほとばしるような勢いで Philp に話す。Sawston では歯牙にもかけなかった Lilia が，かくも雄弁になろうとは Philip には信じられぬことであった。

> 'For twelve years you've trained me and tortured me, and I'll stand it no more. Do you think I'm a fool? Do you think I never felt? Ah! when I came to your house a poor young bride, how you all looked me over — never a kind word—and discussed me, and thought I might just do; and your mother corrected me, and your sister snubbed me, you said funny things about me to show how clever you were! And when Charles died I was still to run in strings for the honour of your beastly family, and I was to be cooped up at Sawston and learn to keep house, and all my chances spoilt of marrying again. No, thank you! No, thank you! "Bully"? "Insolent boy"? Who's that, pray, but you?'
>
> 〔WA, pp.32-33〕

しかし彼女がこれほどまでに期待をかけた Gino との結婚は失敗であった。Lilia はあまりにも長い間 Herriton 家の中で抑圧された生活を続けてきたため，その反撃が一挙にイタリアに来て表われたのである。Charles が Lilia の美貌に惹かれたように，彼女は Gino の男性的魅力に惹かれたのであった。そして彼女は，Gino を自分の抑圧され続けてきたエネルギーのはけ口のかっこうの相手とみなしたのであ

る。それは，ちょうど Sawston で Mrs Herriton が当の Lilia や，或は Philip を相手にしてきたことと全く同じことであった。Mrs Herriton は一種の Domestic Imperialism を取っていると B.B. Finkelstein は述べているが，[7] 彼女のこの主義はそっくり Lilia と Gino の結婚生活に反映されている。Lilia は Mrs Herriton が Philip を扱うように，Gino を扱おうとする。

> She always treated him as a boy, which he was, and as a fool, which he was not, thinking herself so immeasurably superior to him that she neglected opportunity after opportunity of establishing her rule. 〔WA, p.39〕

Lilia は Gino に対して常に優者として振る舞う。彼女の言動のはしばしにそれが表われる。彼女は Gino を 'my silly fellow' と呼び ' "Look what I am giving up to live with you" ' (WA, p.39) と言う。彼女のこの意識——Gino と結婚するために，自分はこんなにも多くのことを犠牲にしてきたのだという——は，かなり根強くつきまとい，そのために Lilia は一層不当に Gino を扱うことになるのである。Herriton 家は Sawston にあっては名家であった。抑圧され白眼視された嫁の立場であったとはいえ，Lilia には無意識のうちにその家風がしみこんでしまっていた。Herriton 家は Sawston society をリードする人々であった。(WA, p.39) Lilia は Gino が社会をリードする人々から無視されているのが気にくわない。彼女は躍起になって Gino をけしかける。彼女の深層意識の中には Sawston に於ける Herriton 家が，大きく立ちはだかっているのである。このような Lilia の攻勢に追い立てられる Gino の姿は滑稽さを通りこして，むしろ哀れさをさえ感じさせる。

> 'Bring your friends to see me, and I will make them bring their people.' He looked at her rather hopelessly. 'Well, who are the principal people here? Who leads society?' The governor of the prison, he supposed, and the officers who assisted him. 'Well, are they married? 'Yes.' 'There we are. Do you know them?' 'Yes—in a way.' 〔WA, p.41〕

Lilia は Gino のあらゆる交人関係に目を光らせる。特に彼女は彼が下層階級の人々と親しく交わるのを嫌った。' "Gino dear, if they're low class, why did you talk to them ? Don't you care about your position?" '(WA, p.41) Lilia はかつて自分が Mrs Herriton にうるさく言われてきたことを，今 Gino に対して言っているのである。彼女があれほどわずらわしく思い悩まされてきた，その Herriton 家的なところが Gino に対して頻繁に出てくるのである。Lilia のこのような尊大さと毎日顔を合わせているうちに，Gino は周囲のイタリア人たちが今や自分にとってはすべて哀れっぽく不愉快なものに思われてきた。(WA, p. 38) これは彼の父が言ったように，彼の堕落なのだろうか。'His father complained that prosperity was already corrupting him and making him unsympathetic and hard;' (WA, p. 37)

'The advance of regret can be so gradual that it is impossible to say "yesterday I was happy, today I am not." At no one moment did Lilia realize that her marriage was a failure;' (WA, p.50) これは第4章の冒頭の部分である。こうして Lilia の破局は読者に提示される。Lilia との生活で圧倒され続けてきた Gino が徐々に己れの地位を回復し始めたのである。最初は自分よりはるかに年上ではるかに金持ちのイギリス婦人ということで，彼女を自分より優位に立つ者と認めていた彼は，次第に異なった眼で見るようになった。即ち Lilia を自分より劣った者として見るようになったのである。'...he realized for the first time the responsibilities of married life. He must save her from dangers,

physical and social,...' (WA, p.43) Herriton 家の人々も同様に Lilian を自分達より劣った者とみなし彼女を庇護してきた。しかし彼らのそれは，Sawston という社会にしみこんだ因襲と偽善性に基づいたものであった。Gino はそうではない。彼の発想は性の違いを基盤としている。'..., for after all she was a woman. "And I," he reflected, "though I am young, am at all events a man, and know what is right."' (WA, p.43) いったん男性としての自我に目覚めた彼にとって，Lilia はもはや畏怖し遠慮しなければならぬイギリス婦人ではなく，妻という名の単なる一人の女にすぎない。'Now that he knew her better, he was inevitably losing his awe:' (WA, p.43) Lilia に対する怖れを失うと同時に，彼の中に結婚以来隅の方に押しやられていたイタリア性が頭をもたげてきた。彼はイタリアのやり方でやっていこうと決めたのである。結局の所，'there should be one master in that house - himself' (WA, p. 38) というのが結婚に対する彼の唯ひとつの考え方だった。ただ彼は Lilia の性急さに対して，あっけにとられていただけなのだ。その間，Lilia が勝手に自分が優者であると錯覚しただけなのだ。今や彼はイタリア式生活の仕方を Lilia にたたき込む。一人歩きをしてはならない，イタリアでは女同士互いの家庭を訪問し合うことはしない，女はひっそりと家に閉じこもっているものだ……等々。やがて Lilia にも，Gino が明らかに彼女の持参金目当てで結婚したのだということがはっきりする。が彼女には為す術もない。

> She had given up everything for him — her daughter, her relatives, her friends, all the little comforts and luxuries of a civilized life — and even if she had the courage to break away, there was no one who would receive her now. 〔WA, p. 54〕

逃れ得る道は一つも残されていない。ただじっと耐えるより他にないのである。外出する自由さえも奪われた今，彼女はあれほど脱け出したいと思っていた Sawston の日々をさえ懐しく思い出す。

> Sawston would be just filling up after the summer holidays. People would be running in and out of each other's houses all along the road. There were bicycle gymkanas, and on the 30th Mrs Herriton would be holding the annual bazzar in her garden for the C.M.S. 〔WA, p.55〕

Sawston には，因襲的なものではあったが多少なりとも女性の活躍できる場があったのである。少なくとも自由に一人歩きが出来たし，お互いの家庭を訪問し合ってパーティを開くことも出来た。Lilia は特にこれといった趣味はもっていない。彼女は音楽を聴くことも，読書することも，そして働くことも好きではなかった。(WA, p.52) 終日することもなく家の中に閉じこめられている彼女にとって Sawston は，いよいよ懐しいものになっていく。'It seemed impossible that such a free, happy life could exist.' (WA, p. 55) しかし彼女はその Sawston を捨ててきたのであった。

このような Lilia の悲劇はひとつには，彼女の結婚生活が営まれたのがイタリアであったということに起因する。イタリアという土地は男性優位の社会構造になっているのである。'Italy is such a delightful place to live in if you happen to be a man.' (WA, p. 42) そして，男性優位の，男性にとっては全く天国のようなこの社会は，実は女性の犠牲の上に成り立っているのであった。それを象徴しているのが Gino である。Mrs Herriton が Sawston を象徴しているように。Gino は Lilia の持ってきた持参金によって，日々何も仕事をせず気ままに暮らしている。'All Gino cared about at present was idleness and pocket-money' (WA,

pp. 41-42) Lilia には終日家にいることを強制し，自分は好きなだけ家をあけ男友達・女友達と楽しく時を過ごす。Lilia に寄生し，そのくせ彼女の人権は無視し犠牲にしたうえで確立されているのが，彼の享楽的生活なのである。かつてはあれほど Lilia の心をときめかせたイタリアの風景も今では彼女の心をいよいよ重くさせるばかりであった。果てしなく幾重にもつながっているオリーヴの植えられた斜面や無数の農園—— それは 'terrible and mysterious all the same, and its continued presence made Lilia so uncomfortable that she forget her nature and began to reflect.' (W, p. 50) やがて彼女は自分が救われそうな道を一つ見出すが，それは Gino の子供を産むことであった。夫に裏切られた (WA, p. 54) 彼女の頼るものは，最終的には子供しかないのだというこの結論は，女の宿命の哀しさを感じさせる。子供ができれば Gino はもう一度自分の方を向いてくれるかもしれない，家庭を大事にしてくれるかもしれない，というかすかな希望をたくして，彼女はそう決心するのである。

> So it was better to live on humbly, trying not to feel, endeavouring by a cheerful demeanour to put things right. 'Perhaps,' she thought, 'if I have a child he will be different. I know he wants a son.' 〔WA, p.54〕

III) Lilia の悲劇

先に引用した第4章の冒頭部分より以前にも Forster は，より明白な言葉を用いて Lilia の結婚生活の破局を暗示している。それは Lilia と Gino の新居を紹介した時である。'It was in this house that the brief and inevitable tragedy of Lilia's married life took place.' (WA, p. 37) Forster が Lilia の悲劇を 'inevitable' と称した所以はどこにあったのだろうか。'But had Lilia been different she might not have married him.' (WA, p. 54) という一文が示すように，Lilia と Gino の結婚が必然的なものであり，その破局もまた不可避のものであったというのは，すべて Lilia という女性のもつ性格からきている。彼女はこれまでに度々指摘してきたように，思慮分別に欠ける依頼心の強い女性である。'Night after night did Lilia curse this false friend (= Miss Abbott), who had agreed with her that the marriage would "do",...' (WA, p.51) 彼女には，Gino に対する初期の態度からも分るように，自分をも含めて一般に人間というものに対する洞察力がまるでなかったし，容易に他人の言いなりになる——逆から見れば，他人に入り込む隙を与える——甘えのようなものがあった。かつて Lilia と Mr Kingcroft の恋愛を知った時，Mrs Herriton はこう非難した。'Lilia must either be engaged or not, since no intermediate state existed.' (WA, p.10) これは Sawston という社会のもつ 'inflexibility' の表われであった。あらゆるものが正当にカテゴライズされなければならない，そうでないとそのものは存在することすら許されないのである。小説の冒頭，駅のシーンに描かれている Lilia ——途方にくれ，たよりなげで子供っぽく，言いなりになる——は，社会の基準から言えば他の誰よりも＜女らしい＞のである。彼女は一人では何もすることができない。責任ある行動というのは彼女には決して期待できない。彼女は姿・形も女性として最も魅力的に描かれている。Charles は彼女が美しいから結婚したのであり，Gino もまた彼女の金目当てではあったが，彼女の肉体的美しさに惹かれたのでもあった。'"I always desired a blonde."' (WA, p. 44) 謂わば彼女は美という天与のもの一つを武器に生きてきたのであり，それ故周囲の人間から大目に見られてきたのである。彼女自身は生きるための努力を何ひとつ真剣に積極的にはやっていない。深く考えるということが彼女の性には合わないのである。'she became as unhappy as it was possible for her nature to be' (WA, p. 50) 喜びも悲しみも深く彼女をつき動かすということはなかった。深

く心にささることがないのであれば，Sawstonにいても，彼女自身が不足感・不自由感を意識することはなかったと考えてもよいのではないか。ここで彼女がSawstonを出たいきさつを思い出す必要がある。イタリア行きは決して彼女の意志から出たものではなかった。すべてLiliaを当分の間Sawstonから追い払うためのHerriton家の者の策略だったのである。'For once in my life I'll thank you to leave me alone. I'll thank your mother too."' (WA, p. 32) Mrs Herritonは家庭を'politics game'の実践の場と考えている策謀家であるが，彼女の策謀はすべて間接的である。LiliaがGinoと結婚しようとしているのを最初に知った時，彼女はそれを止めさせるためPhilipをイタリアへやる。またMiss Abbottが赤ん坊を連れ戻しにイタリアへ行こうとしているのを知って逆上した時も彼女の最初に取った行動は，Philipを派遣することであり，次の行動もHarrietを応援にやることであった。彼女が自分で行くということは決して思いつかない。女性というものはほとんどのことを直接やるのは許されていないのである。Mrs Herritonは子供を，自分の思いを満たすための道具と考えているようである。しかしLiliaは彼女の駒にはならなかった。彼女は孫のIrmaを教育する必要を強く感じ，それにはLiliaが邪魔になるというわけであった。'She was anxious to form her before her mother returned.'(WA, p. 12) Lilia自身はSawstonという社会で，比較的気楽に過ごしてきたと言えるのではないか。Mrs Herritonをいらいらさせた，彼女の何事も深く気にかけない無頓着さが，何よりも彼女の役に立ってきた。しかし，Sawstonから追い出されイタリアへ来た途端，彼女は変わってしまう。かつてPhilipを変えたように，イタリアが彼女を変えたのである。一人では何もできないと思われていた，また実際の所何もできなかったLilia (WA, p. 10)がイタリアに来て初めて，Philipを驚かせたように一個の人間として自立し得たのである。Sawstonで Herriton家の監視の下に生活していた頃のLiliaは，窮屈には感じていたろうが，自分を不幸だと積極的に認めることはしていなかった。が，イタリアに来て，彼女は自分がSawstonで不当に監視され，自由に生きる権利を奪われていたことに初めて気がついた。そして，自分で選択し自分で行動することの喜び，主体的に生きるということの素晴らしさを知った。それがPhilipに会った時に一挙に爆発するのである。'"I can stand up against the world now, for I've found Gino, and this time I marry for love."' (WA, p. 33) しかし皮肉なことに，イタリアはその特権を自国の女性には許さない。彼女はGinoとの結婚により，一度手に入れた自己を再び見失ってしまう。というよりもGinoという男性によって永久に取り上げられてしまうのである。この，一度自己を見出した，つまり主体性を確立し得たというところに，Liliaの不幸は始まるのである。一度自我に目覚めた女性にとって，生きるということは周囲との戦いの連続である。Liliaが戦った相手は，しかし，あまりにも偉大すぎた。彼女の相手はGino個人ではなく，Ginoによって象徴されているイタリアそのものであったのだ。LiliaとGinoの結婚生活の破綻は，ある意味では異民族間の融合の困難さを象徴していると言えよう。これは後の*A Passage to India*へとつながるテーマである。が，*Where Angels Fear to Tread*に於ては，異民族ということよりももっと大きく，男と女という性の違いが前面に出ているように思われる。イタリアは，ここでは徹底的に男性優位の社会として描かれている。(WA, p. 42) そして，そのイタリアを代弁しているのがGinoである。GinoがLiliaに対して主導権を持つようになったそのきっかけは，非常に単純明快であり，象徴的である。(WA, p. 42) Ginoと彼の友人は，Lilia及び女性一般にわたって雑談をしながら，女にこれほど時間をさいてやっている自分たちは男気のある立派な人間だと自画自賛する。そしてForsterはその友人に悲しげにため息をつかせるのである。'He sighed dolefully, as if he found the nobility of

his sex a burden.' (WA, p.46) Gino や彼の友人たちは，何もせずブラブラして金持ちの女に寄食して生きていても，ただ男であるというそれだけで十分に誇り高く堂々と振る舞えるのである。それが大手を振ってまかり通っているのがイタリアなのである。Lilia は Gino と結婚したことにより，自我を確立することができたが，また同時に，それ故に彼女の悲劇は不可避のものとなったのである。

小説の終りの方で，Philip と Gino が語り合う場面がある。'"The affair is being managed by the ladies."' と言う Philip に対して Gino は '"Ah, the ladies—the ladies!"'(WA, p. 134) と叫ぶ。この Gino の叫びには明らかに男性の優越感がにじみ出ている——困った女たちだ。が，我々男としては大目に見てやらなければならないだろうというゆとりが感じられる。そして，このゆとりは実は Prilip の中にも潜在的にあると言えるのではないか。彼は母親のあやつり人形と自認していながらも，終始さめた，時には冷酷とさえ言える自意識をもって，自分の周囲の女たちを見てきた。先述の Philip の言葉には＜男の自分のあずかり知らぬこと。愚かな女たちのやったことなのだ＞という響きが含まれているように感じられる。Sawston は，B.B. Finkelstein が言っているように[8]，女性に管理されている世界である。しかし，今回の事件を引き起こし，ドタバタと大騒ぎをしたのもまた，その女性たちなのである。Herriton 家の唯一の男性 Philip だけが，Mrs Herriton の命により行動はするが，決して熱情的にまき込まれようとはしないで，常に自分を観客席に置いているのである。Philip の言葉には男性の優越性が確かに潜んでいるのである。Mrs Herriton は，こういう Philip のさめた眼，彼女を批判している眼に決して気付いていない。恐らく彼女は，あまりにも強い自己愛，支配欲のために，永久にそれに気付くことはないであろう。

ここに，しかしもう一人，そういう Philip の真の姿にもそして自己満足的な Mrs Herriton のごまかしにも気付いている者がいる。Miss Abbott である。Lilia の軽々しい派手なイメージとは逆の形容が彼女には与えられている。'sober Caroline Abbott'(WA, p. 11) 'she was... young only because she was twenty-three: there was nothing in her appearance or manner to suggest the fire of youth.'(WA, p. 21) Philip が Mrs Herriton のごまかしに気付いていながらも，あくまでも無関心な態度であやつり人形になっているのに対し，彼女はそれに対抗しようとする。Mrs Herriton と Philip の姿を批判し，自分は決してそうならぬよう努力する。しかし一方では，彼女はやはり骨の髄まで典型的な Sawston 人なのである。(WA, p. 21) 彼女は内在する，この二面性に彼女自身は気付いているだろうか。彼女は Lilia の死後赤ん坊を取り戻すべくイタリアへ赴くが，Philip 姉弟と行動を共にするその間，しばしば '"I wish I was Harriet"' (WA, p. 98) という嘆息をもらす。典型的な Sawston 人としての一面を備えながら，一方でそれとは相容れないはずのイタリア的なものに強く惹きつけられていく Miss Abbott。彼女の懊悩は深まる一方であるが，このような彼女の二面性に Philip はいち早く気付き，感嘆の眼をみはる。

> Philip began to see that there were two Miss Abbotts — the Miss Abbott who could travel alone to Monteriano, and the Miss Abbott who could not enter Gino's house when she got there. It was an amusing discovery. Which of them would respond to his next move?
> 〔WA, pp. 95-96〕

彼は良き観察者である。彼は常に自分を楽しませるものを探しており，Mrs Herriton の心理や Miss Abbott の行動など彼にとってこの上ない観察の対象なのである。'Miss Abbott's presence spoilt the comedy. She would do nothing funny.' (WA, p. 91) という一文には，ただ自分が楽しむことしか期待していない彼のエゴイスティックな一面がよく表われてい

る。Miss Abbott の言動に興味をもち始めた Philip は最初は自分の楽しみのためであったが，徐々に彼女を愛するようになる。彼は真摯な彼女の生き方を通して，己れの姿を反省させられる。'She(=Miss Abbott) really cared about life, and tried to live it properly. And Harriet—even Harriet tried.' (WA, p. 98) Philip の Miss Abbott に対する愛情は報いられることはなかったが，彼は今までの自分から脱皮することを決意する。24才の誕生日に届いた Lilia の死をきっかけに，こうして彼は Miss Abbott の力を借りて再生への一歩を踏み出す。

Miss Abbott は小説の終り頃に自分が Gino に強く惹かれていることを Philip に告白する。

> 'I love him,... You're taking it wrongly. I'm in love with Gino—don't pass it off —I mean it crudely—you know what I mean. So laugh at me.'
>
> 〔WA, pp. 157-158〕

Lilia と共にイタリアへ来た彼女の眼に Gino は一目見た時から好ましく映る。それ故，Lilia と Gino の結婚をおおいに勧めたのであった。が，自分のその感情が実は彼に対する愛情だったのだと気付いた時，彼女はがく然とする。しかも性的対象として，Gino を愛しているのであった。彼女は Lilia の結婚がどのようなものであったかよく知っている。Gino という男がどんな人間であるかよく知っている。

> 'He's not a gentleman, nor a Christian, nor good in any way. He's never flattered me nor honoured me. But because he's handsome, that's been enough. The son of an Italian dentist, with a pretty face.... I love him, and I'm not ashamed of it.' 〔WA, p. 158〕

彼女は彼を愛したが，Lilia と異なり自分がただ性的に Gino に惹かれているのであることをよく知っており，またそれと同時に Lilia の結婚がどのような経過をたどったかも洞察している。Lilia が Gino を選んだこと，それが彼女の悲劇の原点であったことを承知している彼女は，Gino に再婚を禁止する。彼が自分の妻を主婦と，赤ん坊の母親としてしか認めないということを見抜いていたからである。'"You have ruined one woman; I forbid you to ruin another."' (WA, p. 116) 彼女が Lilia と同じ不幸を経験せずにすんだのは，彼女が Lilia のたどった道を一部始終知っていたことと，その他にもう一つある。それは何よりも Gino 自身が彼女を性的対象としてみなさなかったということである。彼女と Lilia は共にイタリアへやって来るが，Gino の選んだのは Lilia であった。Lilia の方が性的魅力をより多く持っていたからである。Lilia の死後急速に Miss Abbott と Gino の距離は接近するが，Gino は決して彼女を女性——性的対象としての——とはみなさない。Miss Abbott は彼にとって単なる女ではなく，それを超越するものであった。

> he... stumbled towards Miss Abbott like a child and clung to her. All through the day Miss Abbott had seemed to Philip like a goddess,... And it seemed fitting, too, that she should bend her head and touch his forehead with her lips. 〔WA, p. 150〕

Gino にとって Miss Abbott は母親のように甘えることのできる存在ではあったが，性的対象とはなり得なかったのである。

Miss Abbott は非常に賢い女として描かれている。彼女は非常に慎重でもある。彼女はイタリアと Sawston の間をゆらゆらと揺れ動いており，手さぐりで一歩一歩自分の進むべき道を探しているように思える。彼女は Philip に自分の Gino に対する感情を告白した後，Philip の誘いを断わって Sawston へ帰ると言う。彼女はもう二度と再びイタリアを訪れることはないだろうと言う。'"Because I understand

the place. There is no need." ' (WA, p. 153) ' "The most wonderful things may be to come." ' と言う Philip に ' "All the wonderful things are over." ' (WA, p.156) と断言する彼女。イタリアで経験した素晴らしいことを唯一の慰めにして，彼女はこれからの生涯を Sawston で送ろうとするのである。Lilia と Gino という二人の人間の生き方を目のあたりに見，あやうく Lilia と同じ不幸をたどることから免れた彼女は，これから先 Sawston で何を感じ，どう判断しながら生きていくのであろうか。

むすび

〔Fielding に始まり，通常 Meredith で終わると考えられるイギリスの古い小説の伝統をひいて，彼は自らの作品の中にあって自らの声で語りかけている。……全知の語り手として彼は作中人物に注釈を加え，その動機や行動を説き明かし，それらから教訓をひき出し，賞賛したり嫌ったりするように，我々に指示するのである。[9]〕しかし，Forster のこのようなやり方は，しばしば強引すぎることがあり，それが読者の反感を招くこともある。或る読者は，*Where Angels Fear to Tread* に対し次のような感想を抱いている。[10]

> There is much that is good about the story, but the latter part of it is unconvincing. It taxes our credulity overmuch to believe that after the misconduct of the Italian has brought his wife to an early grave his fascinations should be so great that her dearest friend should 'worship every inch of him.'

Forster は先述のように，Philip に再生への道を与え，Miss Abbott に Mrs Herriton や Lilia とは異なった生き方をさせることで，将来への希望を表わしている。Miss Abbott の真摯な生への態度は*Howards End* に於て，ひたすら二つの世界の融和を目指して努力する Margaret Schlegel につながるものがある。しかし，Forster のテーマをになう主要人物としては，Miss Abbott はあまりにも描き方が不十分であるといえよう。彼女と Gino の関わりは，いまひとつ説得性に欠ける。Gino には〔象徴しなければならないものが余りにも多いために，この小説の機構の中で果たさねばならない役割を果たすことができない[11]〕のである。

Forster は死後出版された *Maurice* を別にすれば，長篇小説は5篇しか著わしていない。*Where Angels Fear to Tread* は他の諸作と異なり，全体が喜劇的に構成されているというのが，この小説に対する一致した見解である。[12] 精神的に追い詰められた Lilia は死の直前 Mr Kingcroft あてに 'Come and save me.' (WA, p. 59) という手紙を出す。しかし郵便配達人が偶然 Gino の友人であったために，この手紙は永久に Mr Kingcroft の手には渡らない。ここでの '... in Italy so many things can be arranged. The postman was a friend of Gino's.' (WA, p.60) という Forster の表現は少々喜劇じみた印象を与えるものであり，Lilia に寄せる我々読者の共感，つまり彼女の精神的局限状態が我々にもたらす緊張感は，ここで不意にはぐらかされてしまう。従って全体的な読後の印象としては，Lilia の悲劇はさほど同情すべきものではなくなる。真に切迫したものとはならずに，イメージがぼやけてしまうのである。Lilia の死すら読者にとっては，不本意ながら，突然喜劇じみた様相を帯びてくるのである。

Forster はこの作品の中で，イギリスの中産階級の生き方・考え方を Herriton 家の者——特に Mrs Herriton — を通してかなり辛らつに描いているが，彼はそのような中産階級の偽善・因襲性を鋭く批判すると同時に，Philip の Mrs Herriton に対する見方からも推察できるように，彼らを冷笑してもいるのである。この小説の中では Forster は，しばしば Philip と一体化している。Forster は自分の声で意見を述べていることも多いが，Philip に内在し

て自分の意志を読者に伝えていることもずい分多いのである。*Where Angels Fear to Tread* は，原句は Alexander Pope の詩中の一句——'Fools rush in where angels fear to tread' である[13]と言われている。Forster は恐らく Mrs Herriton は勿論のこと，事件に関わったすべての人間を愚者扱いしているのではないか。彼にそのような意図があるとすれば，この作品が喜劇に仕立てあがるのは当然のことであろう。しかし，唯一人Miss Abbott だけは除いてもよいのではないか。というのは前にも述べたように，この小説の中では手さぐりし，時にはしりごみするかのように描かれている彼女の，前進した姿が後の諸作品に見られるからである。

注

1. ジョージ・サンプソン著平井正穂監訳『ケンブリッジ版イギリス文学史Ⅲ』p. 231（研究社）
2. 同上 p. 231
3. 同上 p. 232
4. 中野好夫・他訳『私は信ずる』pp. 147-166 参照（社会思想社）
5. 斉藤美洲編著『イギリス文学史序説』p. 452（中教出版）
6. Bonnie Blumenthal Finkelstein, *Forster's Women* (Colombia University Press, 1975) p. 1
7. ibid., p. 7
8. ibid., p. 5
9. ウォルター・アレン著　和知誠之助監訳『イギリスの小説・下』p. 181（文理）
10. Philip Gardner (ed.), *E.M. FORSTER: The Critical Heritage* (Routledge & Kegan Paul, 1973), p. 47
11. ウォルター・アレン著『イギリスの小説』p. 185
12. Philip Gardner (ed.), op.cit., pp. 43-64 参照
13. 朱牟田夏雄・他編『講座英米文学史10小説Ⅲ』p. 46（大修館書店）

付記・テキストは E.M. Forster, *Where Angels Fear to Tread* (Penguin Books, 1966) を用いた。